
臨界期説再考

石 黒 敏 明

毎年4月新入生に「大学で何を学びたいか」と問うと、中には「発音も含め母語話者のレベルまで言語能力を高めたい」と答える学生がいる。純粋に言語使用能力を高めたいという若者の新鮮な夢に接するたびに、40数年前大学生時代、臨界期説を学び言語習得に関して一時的に悲観的になった経験が脳裏に浮かぶ。そこでこの臨界期説とは、我々言語学習者を真に悲観的にさせる仮説なのかどうかを今回再考してみたい。

脳の可塑性や脳機能の一側性の面から、思春期までに言語に接しないとその言語獲得は不可能もしくは極めて困難とする説は、第一言語(L1)や第二言語(L2)習得分野でよく語られる。しかし一側性の時期に関しては思春期を待たず5歳ぐらいで完了する主張もあり、また臨界の期間に関しても学者間で意見の一致が見られない。

L2習得の分野では「臨界期説」以外に「敏感期説」も提唱されている。前者は、言語開始時期(AO= age of onset)がある時期を越えると最終達成(UA = ultimate attainment)レベルは急激に衰え、その時期は決定的かつ絶対的とする説で、後者は敏感期を絶対的なものとせず、UAは徐々に長期に渡り衰えるとする説である。前者の説には「マルチ臨界期説」、すなわち言語能力の構成能力によって臨界の時期が異なるとし、音声能力に関しては6歳を、文法能力に関しては15歳をその臨界とする説もある。

さらに他説も統合すると、「成長期」(maturation period)を誕生時点から約15才までとし、その間L1・L2共に「成長効果」が負に働きUAは曲線的に降下し、成長期以降は他の要因、「訓練効果」や「社会・心理的效果」に決定される。米国で発

見されたGenieは13才半まで隔離され、L1習得からの「訓練効果」は受けず、成長と共にL1獲得能力を喪失したケースである。一方成人後にL2をネイティブレベルまで習得したJulieは「社会的・心理的效果」の成果だとする。しかし、どの説もUAとAOとは負の関係にある点で共通性がある。

しかしこの負の相関関係とは対照的に、L2学習者の認知能力発達は、思春期にかけて「形式的操作段階」に達し、彼らの「問題解決能力」と年齢の関係は、右肩上がりの正の相関関係になる。そこで、思いだすのが、私のスタンフォード大学の恩師Robert L. Politzerである。彼は臨界期を越えてオーストリアから米国に移民した。私が学んだころ、彼は60歳台で、発音はドイツ語訛り、論文や著書など業績の面では他のスタンフォード大学教授に勝るとも劣らないものだった。すなわち、発音面では米国生まれのレベルまでは達成できなかったが、論理的分析的能力を必要とする文法面では、他の学者と同じレベルにまでに到達した。これは、まさに発音面ではAOと負の相関、知的能力面ではUAと正の相関を示す事例と言える。さらに一つエピソードを追加すると、教授の兄はセールスマンだったが、社会的要因(動機づけ)からか米国生まれのような訛りのない発音だったらしい。

これらの学説や事例から、たとえ臨界期を越しても、心理的・社会的要因や認知能力の発達により発音の壁や文法の壁を乗り越えられる可能性があること、すなわち我々L2学習者は、臨界説だけで必ずしも悲観的になることはない結論できる。